

# 革命のエチュードを捧げる — ショパン 郷愁のピアノ —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

民衆の決起はまたしても血の海に沈められた。母国ポーランドがロシア帝国の支配から解放される日はいつ訪れるのか。フレデリック・ショパン（1810—1849）は悲愴な想いで家族や友人や叛乱に加わった人々の無事を祈った。

ひとり故郷を離れてパリに移住したショパンは19世紀前期ロマン派を代表するピアニスト・作曲家として一世を風靡する。発展途上のピアノの可能性を極限まで追求し、繊細で抒情的な作風によってピアノの詩人と呼ばれるようになった。

しかしショパンの深遠な世界は癒し系の音楽にとどまらない。二度と戻れなかったポーランドの自由と平和と独立を願い、忍び寄る病魔と格闘する炎のような激情が秘められていた。

## 美しい花畑に隠された大砲

ショパンはワルシャワ公国、現在のポーランドの首都ワルシャワ近郊のジェラゾヴァ・ヴォラで生まれた。フランスからの移民である父ニコラはフランス語の教師となり、没落した貴族の末裔である母ユスティナと結婚する。当時のポーランドは常に周辺のロシア、ドイツ、オーストリアなどの軍事侵攻に脅かされていた。戦時の際はニコラもワルシャワの市民兵として戦った。

幼い頃のショパンは母が弾くピアノの美しい音色を聴いて涙を流す感受性の強い子供だった。最初は姉のルドヴィカからピアノを習い、音楽的才能に恵まれていたことから優秀なピアノ教師の

もとで腕を磨いた。彼は耳にした旋律をすぐ再現し、新たなメロディを紡ぎ出すことができた。

わずか7歳で現存する最初の作品『ポロネーズト短調』を作曲し、楽譜

を自費出版する。翌年、公開演奏を行うと古典派のモーツァルトやベートーヴェンに匹敵する神童として一躍脚光を浴びた。

16歳でワルシャワ音楽院に入学し、3年の教育課程を経て首席で卒業する。すでに天才音楽家として将来を嘱望されていたショパンはロシア帝国の支配下にあるワルシャワから旅立つことを決意した。新天地をめざしてオーストリアのあこがれの音楽の都ウィーンに渡り、演奏会を開いて自立した音楽家としてのデビューを果たす。

19歳のショパンはウィーンにおける音楽活動に情熱を燃やす一方、ワルシャワへの深い郷愁にとらわれた。幼い頃はユーモアにあふれ、漫画を描くのが得意で学校の人気者だった。だが現在は祖国を離れて孤独に打ちのめされようとしている。音楽家としての自分は何をなすべきか。ショパンは望郷の想いを音楽で表現することに心血を注いだ。そして独特の3拍子のリズムを持つ民俗舞曲のマズルカとポロネーズのピアノ曲を数多く作曲



ワルシャワのショパン像

する。のちに同時代の著名な作曲家で音楽評論家としても活躍したシューマンは支配者への怒りも込めたショパンの楽曲を「美しい花畑の中に大砲が隠されている音楽」と評した。

## 哀しみの別れのワルツ

激動のポーランドでは1830年、ワルシャワの革命軍が帝政ロシアの支配に武装叛乱した11月蜂起が勃発する。ウィーンではポーランドを非難する声が高まり、音楽活動を継続することが難しくなった。ショパンは父の故郷であるフランスで再出発することを決断する。

渾身の11月蜂起はワルシャワから全国に波及したものの、軍事力で圧倒的に優勢なロシア軍によって翌年10月に鎮圧された。パリに赴く途上、ショパンは11月蜂起が敗北したことを知らされる。家族が生きていたことが唯一の救いだった。胸が張り裂けそうな悲嘆のなかでポーランドの人々の過酷な運命に想いを馳せ、神がロシア軍の勝利を許したことに慟哭した。

それでもショパンは絶望せず、みずからの音楽によって失われた革命を救済しようとした。革命のエチュード＝練習曲として後世に伝えられる『練習曲小短調作品10-12』を作曲する。革命というタイトルは傑出した演奏力でピアノの魔術師と畏怖されたハンガリー出身のフランツ・リストが命名した。ショパンの難曲を超絶技巧で完璧に弾きこなすリストに敬意を込めてショパンは革命のエチュードを彼に捧げた。

パリに移り住んだショパンはさっそくピアノの演奏会を開き、聴衆から喝采を浴びる。新聞で音楽批評を担当していたシューマンはショパンの演奏を聴いて「諸君、脱帽したまえ、天才だ」と絶賛した。すぐにパリの名士となったショパンは高名な音楽家はもとより画家のドラクロワや詩人のハイネらと親交を深める。ピアノ教師としても才能を発揮し、高額なレッスン料にもかかわらずヨーロッパ各地から貴族や富豪の令嬢・子息たちが集まった。ロスチャイルド家などが自宅で開くサロン・コンサートの依頼も殺到する。

25歳になったショパンはポーランド伯爵令嬢のマリアと再会し、晴れて婚約したものの、健康

状態を理由に破棄された。肺結核を患うショパンはマリアにもらった薔薇の花と手紙を紙で包み「わが哀しみ」と書き記す。そして別れのワルツとして知られる『ワルツ 変イ長調』を作曲した。

## ポーランドに心臓を帰す

マリアとの離別後、ショパンは『愛の妖精』などで知られる作家ジョルジュ・サンドと出会う。男女同権をめざす活動家でもあったサンドは年下のショパンへの恋愛感情を率直に打ち明ける。

ふたりの子供を持つサンドは病状が悪化するショパンを「3番目の子供」と呼んで懸命に看護した。だが共産主義者のカール・マルクスや無政府主義者のミハイル・バクーニンと出会って政治活動に奔走するようになり、サンドとショパンの蜜月関係は終焉を迎えた。10年に及ぶ交際中に『バラード第4番』『英雄ポロネーズ』『舟歌』『幻想ポロネーズ』など多くの傑作が生まれた。

サンドと別れて鬱状態に陥ったショパンを支えたのはスコットランド人の弟子で秘書も務めたジェーン・スターリングだった。裕福な銀行家の娘であるジェーンはイギリスへの演奏旅行を企画し、経費も含めてすべて準備を整えた。ショパンと彼女が近く婚約を発表するという噂が流れたものの、ショパンは恋愛感情を抱いていなかった。

1848年、ロンドンでポーランド難民を支援する最後の公開演奏を行った。ジェーンの実家であるスコットランドの古城に泊まったときショパンは母や姉と共に祖国ポーランドで民俗舞曲を題材にした自作曲を演奏する夢を見る。

翌年、死期を悟ったショパンは姉のルドヴィカとパリで生涯最後の再会を果たす。死の直前まで自分は神の存在を信じないからと信仰告白を拒んだ。そしてジョルジュ・サンドが「私の腕の中で息を引き取らせてあげる」と約束したのにと不満を洩らした。10月17日の深夜12時過ぎ、医師が苦しいかと尋ねると「もう何も感じない」と答え、午前2時頃に39歳で静かに息を引き取った。

遺言に従い、葬儀の前に取り出された心臓は姉のルドヴィカによって祖国に帰り、ワルシャワの聖十字架教会に保管された。ジェーンは葬儀後も長いあいだ黒衣を身にまとして喪に服した。